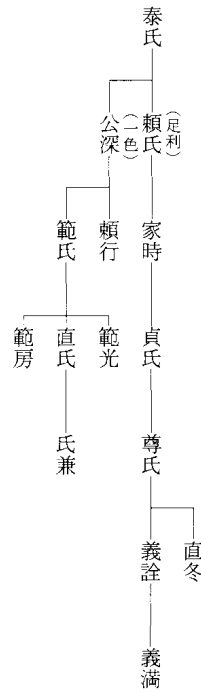


共に凶徒退治に当たられよと命じた。大幅な権限を鎮西管領に付与したのである。しかし、尊氏はこの年、一色道猷の子直氏へ、所務争論と地頭御家人の裁判については、子細を調査し報告せよと、権限の一部に制限を加えている。

一色氏略系図



二 鎮西管領足利直冬

足利尊氏の妾腹の子直冬は尊氏の表弟直義の養子となって成長し、貞和五年（二三四九）四月、中国探題となつて、中国地方の南朝方討伐のため備後鞆ノ津へ下向した。しかし、二か月後には、執事高師直のクーデターが起こり、養父直義が一時的に失脚したため、直冬を嫌う高師直は直冬の追伐を命じ、備後へ向かった。直冬は四国へ逃亡したと噂されたが、肥後の河尻氏に迎えられて肥後国に上陸した。この時、（宋木村カカ）附近に住む宇都宮大和太郎左衛門尉（隆房か）が籠城して直冬・詫磨宗直らと戦った。

肥後の守護少貳頼尚は筑前・豊前の守護代に命じて宇都宮城を救援しようとした。

城井城合戦

豊前では、観応元年（一三五〇）五月、南朝方の新田伊達小次郎（貞広か）・如法寺孫次郎入道円康が拳兵し、築城の城井城を包囲したらしい。大蔵一族成恒左衛門三郎種定は築城へ出陣したところ、今度は上毛郡に現れて所々を焼き払ったので、頼尚の守護代西郷兵庫允頼景に従つて、篠塚で戦い、彼の証判を得た。

このころ、新田義氏が馬岳（よ）に拠つたというが、義氏についての史料を確認することはできない。ただし、暦応三年（二三四〇）八月の『長門国御家人三井孫五郎資基軍忠申状』に長門国豊田郷の工藤三郎城の後ろ



馬岳山頂の新田氏表忠碑

巻きとして、先国司日野宰相邦光・新田左馬助義氏・吉見八郎ら大勢が押し寄せたとある（『秋藩閩閩録』所収）。
三井家文書

九州では、この年三月、筑前怡土郡の一貴寺に籠城した新田遠江禅師が、十一月には筑後赤司城に現れている。これより前（建武四年（一三三七）十月）、新田禅師が宇佐郡から上毛郡へ出現している（『編年大友史料』五）。
『栗丸文書』 観応二年八月ごろ、新田

伊達次郎貞広は直冬方に属して、豊後国へ出陣させられている。

直冬と戦っていた少弐頼尚は、やがて直冬を娘の婿として迎え、九州制覇を目指す。数年前から鎮西管領一色道猷と肥前国や軍事指揮権をめぐって対立するようになっていたから直冬と結んで、一色道猷を九州から追放しようとしたのである。観応元年六月一色道猷と子息直氏は赤間関へ逃亡した。道猷は**宇都宮公景**へ元永村元永村 即ち赤坂 伊方庄 武藤対馬左近 即ち道猷、肥後国岩野村岩野村 即ち藤原 同国木葉村 即ち藤原 地頭職といった武藤氏や宇都宮一族の所領を与えて九州渡海の機を窺った。

このころ、大友氏は黒田庄など頼尚跡を尊氏より与えられている。山鹿西郷も氏時の所領となっており、頼尚に従った西郷頼景の本領が没収されて、豊前守護となった大友氏に与えられたのであろう。

直冬は「兩殿の御意を息め奉るため」と称して高師直・師泰兄弟の追討を九州・中国地方の武士に命じた。頼尚は、直冬のことを「公方」と呼び、その発する文書を「御教書」と称して、尊氏方武士の追討を命じた（『阿蘇』）。ここに至って足利尊氏は直冬討伐を決意し、自ら備前まで進んだ。その留守中、京都を脱出した直義が南朝方に降り、さらに北陸・関東の武士を募って、留守を預かっていた尊氏の嫡子義詮を攻めて京都を占領し、翌観応二年（一三五二）二月、尊氏軍を破って政治の実権を取り戻した。尊氏は高師直・師泰兄弟の身柄を差し出して直義と和睦した。直義は翌三月、直冬を正式に鎮西探題に任命し、尊氏と直冬の間も修復させた（『園太』）。

筑後国守護 宇都宮常陸前司冬綱（のち守綱）は、尊氏の再上洛以

城井 冬綱 来、筑後国の守護であった。直冬が下向すると詫磨別当宗直に筑後国守護職を一時与えていたが、観応二年二月ごろ、また冬

綱が守護職を務めている。

この年八月、直義は北陸へ走り、以後、京都に戻ることはなかった。翌観応三年二月、直義は鎌倉で毒殺された。

観応二年九月、尊氏は豊後の田原貞広へ「直義とは和睦したが、直冬とは和睦しないから、誅伐せよ」と命じている。直義の失脚によって、直冬の鎮西管領は六か月間で終わった。直義の死後は、直冬の九州における勢威も衰え、九か月後には長門国へ逃れて南朝方に降った。尊氏が直義を失脚させる際に、南朝と和睦したので、九州でも一色道猷が南朝方の兵力を借りて少弐頼尚の拠る太宰府を包囲した。頼尚は尊氏が南朝と手切れしたのを機に、南朝方となり、菊池武光の応援によって危地を脱した。

文和二年（一三五三）、一色道猷は、鎮西管領の座を嫡子直氏に譲り、弟範光を肥前守護代として、少弐頼尚の拠る太宰府浦城攻略に腐心した。

しかし、筑前針摺原合戦に敗れ、管領は肥前綾部城に逃げ籠った。

懐良親王の 北九州制圧 少弐頼尚を味方に加えた南朝方は、急速に勢力を増

し、文和四年（正平十年「一三五五」）九月、懐良親王軍は大軍を率いて鎮西管領方の肥前小城を手始めに、日田・玖珠・由布院・狭間・豊後国府・日出大神・宇佐・城井・殖木・博多と九州を半周する大遠征を行って、ほぼ九州を一統し、鎮西管領一色直氏を長門国へ奔らせた。

豊前国守護 この間、足利尊氏は豊前国守護職を少弐頼尚から取り

城井 守綱 上げ、大友氏泰や宇都宮常陸前司冬綱に与えたが、少弐頼尚の勢いが強く、冬綱も一年足らずのうちに懐良親王の大遠征をうけて、南朝方に降ってしまった。

宇都宮冬綱が豊前国守護であったことを示す唯一の史料は次の『川瀬文書』である。

(田原直貞)
 豊前藏人三郎入道正曇代重海申す豊前国苅田庄地頭職の訴状これを遺す、氏家九郎、同子息掃部助、荒宇津大和孫太郎以下の輩、所務を濫妨すと云々、事実ならば、はなはだ然るべからず、彼の輩を退け下地を正曇に沙汰し付け、請取をとり進ずべきの状、件の如し

文和二年十二月二十日
(一三五四)

宇津宮常陸前司殿
(守綱)

御判(足利義詮)

(原漢文)

南朝方に投降した直冬は山陰の山名時氏と共に京都に迫り、吉野の楠木正儀らと図って、文和二年・文和四年と、一時京都を占領した。

豊前守護代 少式頼尚は延文四年(一三五九)、幕府側へ寝返って

西郷 顕景 豊前・筑前等の守護職を維持したが、この間、豊前国の守護代を務めたのが、西郷兵庫允顕景である。顕景の前に康顕という守護代が見えるが、彼も西郷氏であろうという(山口集正『中世九州の政治社会構造』造所収『南北朝期の豊前国守護』)。

西郷顕景は観応の擾乱以前は軍事指揮官として行動し、頼尚が直冬方・南朝方となつてからは、政治面にも参画するようになった。



豊前守護代西郷兵庫允顕景の花押

頼尚が南朝方として行動していた正平十一年(一三五六)ごろから、西郷顕景は宇佐勒寺領大野井庄等を違乱し、顕景の従人らが神官・社僧を殺害したため、神輿を動坐して愁訴する事件があり、頼尚の守護職を改替して、国司五条左馬権頭良遠が派遣されて押領

された寺社領を宮寺に返還させたという(『八幡書法』『寺文書』)。

第8表 観応擾乱関係図

南朝方	北朝方		年号	將軍	鎮西管領	豊前守護	宇都宮氏
	貞和	観応					
正平	貞和	観応	正平	足利尊氏	一色範氏	少式資経	城井冬綱・佐田公景
北畠親房	足利直義	足利直冬	北畠親房	足利直義	足利直冬	少式頼尚	西郷顕景
懐良親王	懐良親王	少式頼澄	懐良親王	懐良親王	少式頼澄	如法寺門康・宇都宮隆房	

三 征西將軍懐良親王

征西大將軍懐良親王は延元元年(一三三六)九月、八歳にして、五条頼元ら十二人を従え、九州に向かったが、瀬戸内海の高橋那義範のもとで三年を過ごし、興国三年(一三四二)五月、薩摩津につき、谷山降信のもとで五年を送って、正平三年(一三四八)、宇土を経て菊池氏の本拠、隈府に入った。この時、二十一歳の若者に成長していた。

翌年には足利直冬が肥後に上陸して、鎮西管領一色道猷との対立が始まったから、九州の南朝方にとつても、勢力伸張の好機が到来した。

正平六年十月、足利尊氏が南朝方に降つて、弟直義を京都から追い出そうとすると、九州でも一色道猷が南朝方と合体して、太宰府の直冬・少式頼尚を攻め、直冬を中国地方へ奔らせ、頼尚は辛うじて一色勢を退けると南朝方に降り、菊池武光と共に、文和二年(一三五三)二月、筑前針摺原に一色直氏軍を破り、官方が優勢となつて、探題を肥前綾部城